

高知県における新規需要米の適応性

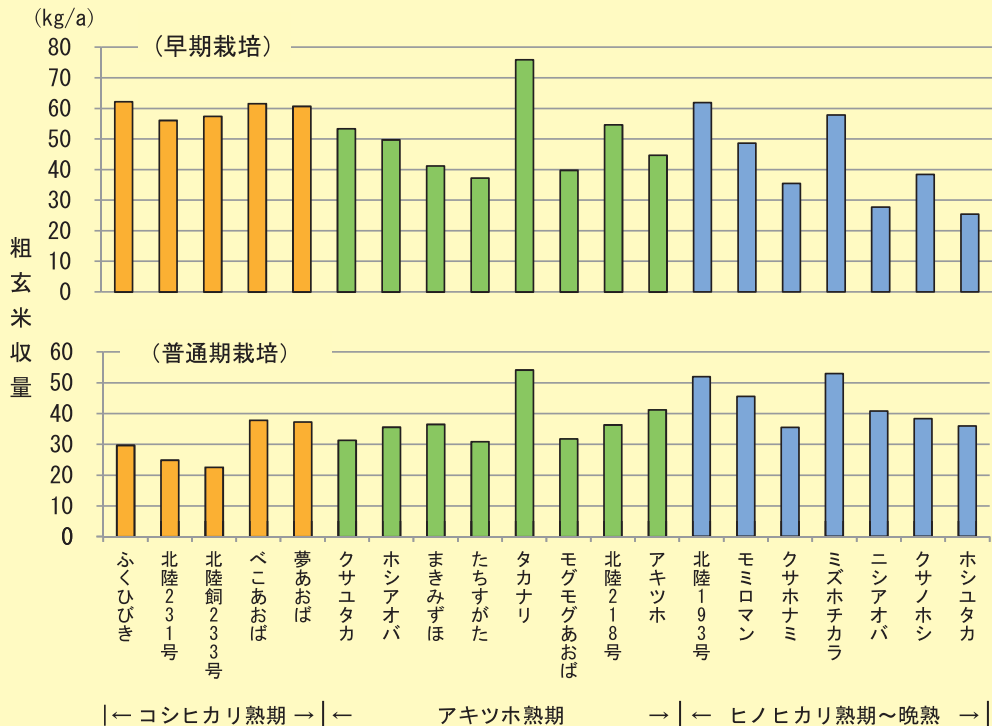


図 新規需要米専用品種の作期別収量

注) 移植は早期栽培では2010年4月13日および2011年4月18日に、普通期栽培では同6月1日および同6月2日に行った。施肥は緩効性肥料のLPE(14-14-14)を、窒素成分で早期栽培では1.4kg/a、普通期栽培では1.0kg/aを全量基肥施用した。収量は両年の平均で示した(普通期の北陸231号および北陸233号は2011年のみのデータ)。なお、熟期は早期栽培の出穂期により分類した。

奨励品種決定調査による‘コシヒカリ’の2010年、2011年の出穂期は、早期栽培でそれぞれ7月6日および7月4日、普通期栽培では、両年とも8月6日であった。また、普通期栽培‘ヒノヒカリ’の出穂期はそれぞれ8月19日および8月21日であった。

主食用以外の用途に利用する新規需要米の栽培が全国ですすめられており、高知県でも有望品種の選定が望まれていました。そこで、飼料用米について、高知県での適応性を検討しました。

その結果、早期栽培において粗玄米収量が最も高かった品種は、コシヒカリ熟期では、‘ふくひびき’次いで‘べこあおば’‘夢あおば’でした。アキツホ熟期では、‘タカナリ’が最も多収となりました。ヒノヒカリ熟期～晩熟では‘北陸193号’次いで‘ミズホチカラ’でした。

また、普通期栽培では、コシヒカリ熟期で‘べこあおば’次いで‘夢あおば’が多収となり、アキツホ熟期では‘タカナリ’が、ヒノヒカリ熟期～晩熟では‘ミズホチ



カラ’次いで‘北陸193号’が多収でした。これらの品種は、高知県の作型および熟期に応じて多収であることから、飼料用米として適応性が高いと考えられました。

(水田作物担当 溝渕正晃 088-863-4916)